
敵機来襲

秋月 涼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

敵機来襲

【Zコード】

N1152E

【作者名】

秋月 涼

【あらすじ】

【短編読切作品】灼熱の太陽が容赦なく照りつけ、真夏の空はどこまでも白く輝いていた。あの日の暑さを、乾いた空気を、今でも良く憶えている。

灼熱の太陽が容赦なく照りつけ、真夏の空はどこまでも白く輝いていた。

あの日の暑さを、乾いた空気を、今でも良く憶えている。

突如、静寂を破つて、日焼けした戦友が鋭く叫んだ。

「いたぞ！」

強い逆光の中に、敵の姿がくっきりと浮かび上がつていた。俺たち防衛部隊には即刻、鋭い緊張感が走つた。隊員は迅速に配置につけ、臨戦態勢を整えた。

警戒の網を張り巡らしているのに、やつらは僅かな隙を突いて俺たちの領域に侵入してくる。いつたん近くに身を潜めて機会をつかがい、夜更けに総攻撃を仕掛けてくる魂胆だ。

飛び散る赤　　血塗られた戦いの記憶が、まざまざと蘇る。

季節はめぐり、再び暑い夏がやってきたのだ。

右へ、左へ、すぐに右へ。集中力を極限まで高め、両目を見開いて敵の姿を追つた。張り詰めた空気の中で、自分の心臓がバクバク鳴っているのが分かつた。

ここで倒さなければ、いずれ俺たちがやられるんだ。

相手も馬鹿じゃない。急旋回、きりもみ飛行などを繰り返しながら上昇し、何とかして対空砲の射程範囲から逃れようとする。

「逃がすか！」

素早く照準を合わせ、俺は猛然と攻撃を開始した。虛空に一発、一発と、立て続けに破裂音が響き渡つた。無我夢中で、がむしゃらに、俺は戦つた。

パシュン、パシュン、パシュン。

狙いを定める時間すら惜しくて、とにかく続けざまに対空砲を使

用した。これだけやれば、一発くらいは当たり、仕留められると思つていた。防衛部隊の武器は、飛距離には難があるけれども威力は抜群で、当たりさえすれば敵は墜ちる。

「落ち着いて攻めるんだ！」

戦友の忠告も耳に入らず、俺は戦いにのめり込んでいた。後から考えれば、その時の俺は自軍の武器と自分の能力を過信し、敵を見くびつっていたのだろう。

結局、渾身の迎撃は全くの徒労に終わってしまった。相手は見事なほど敏捷な動きで俺の連続攻撃を回避し、防衛部隊の手の届かない場所へ無事に撤退した。

その上、激しい戦闘の末に、いつしか俺は敵の姿を見失っていた。本当にあつという間の出来事で、気がついたら全てが手遅れになつていた。

愕然と立ちつくした俺は、もはや追撃を断念するほかなかつた。額にはいつの間にか汗の粒が幾つも浮かび、こめかみを伝つて両目に染みた。

戦いの帰趨を決める重大な緒戦で、俺は手痛い敗北を喫してしまつた。責任感がずつしりと心にのし掛かってきた。へまをした自分への怒りが膨らみ、情けなさと悔しさと恥ずかしさとが交錯し、沸騰していた。

それらの重い感情をいなくなつた敵にぶつけ、八つ当たりすることで、俺は何とか自己嫌悪に耐えようとしていたのかも知れない。

「野郎つ！ 出でこい、この根性無しが。俺と戦え！」

俺は吼えた　吼えることしかできなかつた。そして乾いた唇をきつく噛んだ。

「慌てるな。じつとしていれば、絶対にあいつから来る」

戦友の冷静な言葉で、はつと我に返つた。

度重なる敵の夜襲に、友軍は何度も悩まされていた。ここで逃がしたら。

戦いのさなか、俺は知らず知らずのうちに焦っていたのだろう。鼓動は速まり、身体も火照って熱くなっていた。

「……畜生っ」

考えてみれば、きちんとした作戦を遂行したわけではなく、そもそも俺が独断で実行した無理のある攻撃だった。恨み言を呴きながらも、いつたん引き下がり、体勢を立て直すことを選んだ。

「あいつ、どこへ行つた？」

「あそこだ。待つて、おびき寄せて、一気に叩こう！」

戦友が少し遠くを指差した。彼は相手の撤退経路を把握していた。

示された方を凝視すると、憎らしい敵は確かにその付近を飛んでいた。遙かに高い場所で、今はまだ手を出せない。俺たちの対空砲では届かないのだ。

折りしも通り過ぎた爽やかな空気の流れが、身体だけにとどまりず、心までをも冷やしてくれた。軽く溜め息をついて、肩の力を抜いてみる。

「ふう。あいつめ、命拾いしたな」

苦々しい思いで、ゆがんだ笑みを浮かべた俺は、遠ざかる敵の姿を睨みつけた。そして次こそは絶対に仕留めてやると、気持ちを前向きに切り替えるのだった。

太陽は燐々と、痛いほどの輝きで照りつけていた。

敵はしばらく警戒をし、遠くの方をさまよっていた。俺たちはやつの姿を見失わないように偵察を続けた。一時的に、戦闘は表面上の小康状態となつた。

息をひそめて、俺たちは敵が近づいて来るのを待つた。早く動き

たいが、それよりも確実に勝ちたい思いが強くて、じつと我慢する。領域の平和を守るため、これ以上の失敗は許されない。唾を飲み込んで、じぶしに力を込めた。同じ過ちは繰り返さない。今度は相手に照準を合わせ、一発で撃ち落としてやるぞ。

しばらくすると、状況に変化があった。

抵抗が終わつたと見たのだろう。やつは性懲りもなく、じわじわとこちらへ向かつて移動を始めた。戦友が予想した通りの展開に、俺は少し身を乗り出した。

罵にかかつたな、飛んで火に入る夏の虫とはまさにお前のことだ。これを貴様の最後のフライトにしてやる。あつという間に血が燃えたり、気持ちは高ぶついたけれど、俺は何とか自らを律し、対空砲を準備して敵の動きを注視した。

そのすぐ後だつた、耳につく飛行の音が急激に近づいてきたのは。敵をギリギリまで欺くため、地上で迎え撃つ防衛部隊はいまだに息を潜めて微動だにせず、まずは首と頭だけを動かして相手の飛行経路を分析した。

俺は指先に力を込めた。いつの間にか、掌にはじつとりと汗をかいていた。

あと少しで対空砲の射程範囲になると思った時、敵は異常を察知したのか、少し上に逸れた。こうなつたら一喜一憂せず、辛抱強く機会を待つしかない。戦友も警戒しつつ、隙あらば自分から攻撃を仕掛けようど、俺のすぐ横で戦いのゆくえを見守つている。降り注ぐ陽の光は相変わらず強く、果てしない大空は明るかつた。

まもなく敵は再び下降してくる。忌まわしい飛行音が迫り来る。類い希な機動力と冷徹な判断力を併せ持つ敵は、何度も急旋回を繰り返しながら、こちらに向かつて降りてくる。敵は俺たちを狙い、俺たちは敵を狙つている。渴いた喉が張り付く。息もできないほど

の緊迫感の中で、真夏の太陽がきらりと輝く。

敵の姿を逃さないように集中力を限界まで高め、対空砲が確実に命中する距離かどうかを判断し続ける。

もうちょっと そのまままい。

今だ。

瞬時に手を伸ばす。

対空砲が大地を発つ。

相手の動きがゆっくりに見える。

俺の武器が近付く。

敵は速度を増す。

互いの執念が燃える。

追尾する。

振り切ろうとする敵。

慌てて急旋回。

予想の範疇だ。

さらに迫る。

接近する。

追いつく。

肉薄。

ゼロ。

その刹那、付近を圧倒する強烈な破裂音が響き渡った！

パシュッ！

攻撃の時に発生した鋭い風が、だんだんと収束していった。その後は不気味なほどに空虚な静寂が支配した。

とりあえず、やつの田障りな姿は見えないし、耳障りな音は聞こえなくなつた。俺の迎撃は敵を捉えた ように思えた。作戦は上手く行つたのだろうか。

心臓は戦いの余韻を残し、いまだに激しく叫んでいたが、判断力の方は不思議と落ち着きを取り戻し始めていた。やつの残骸を発見するまでは糠喜びできなければ、いやが上にも期待感は高まつてゆく。

戦友が半信半疑の様子で訊ねた。

「どうだ？」

「探してみるよ」

はやる気持ちを抑えつつ、身を乗り出して眼下の世界を確認した。程なくして、俺の両手はある一点に吸い込まれていった。

「あつ

あいつだ 。

ああ、間違いない。間違うはずがない。

撃墜されて潰れた敵の姿が、そこにあつた。

「やつた、勝つた！ 大勝利だ！」

思わずガツツポーズを取つた。激戦の後遺症で掌がひどく痛んだが、それが大して気にならないほど、俺はほつとしていた。長い重圧から解放されたからだ。

「やつたな」

戦友である兄がねぎらってくれた。しかし、そう言つた彼の表情は複雑だった。

彼の顔を見ているうちに、勝ち戦の高揚感が不思議と冷めていった。

もはや満面の笑みは浮かべられない。俺は考えた。いつたい何故、血で血を洗い、命を賭してまで争わなければならないのだろう。これが互いの宿命と、頭では理解しているつもりだれど 戦いの後

にはいつも、黒ずんだ迷いと虚しさとが、心の奥底をよぎる。俺は忘れていた疲れが急激にのしかかってくるのを感じた。

ともあれ一つの戦いが終わった。当面、しつこい夜襲は落ち着くだろう。

だが、真夏の死闘は始まつたばかりだ。敵の数は多く、再び領域の平和を脅かすだろう。決して勲章の貰えることのない、辛く厳しい戦いは続いてゆくんだ。

つぶれて血のにじんだ、ヤブ蚊の死骸。

それを柔らかな白いティッシュでくるみながら、俺は思った。

蚊取り線香、買おつかなあ。

(ア)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1152e/>

敵機来襲

2010年10月8日15時07分発行